

白き満月

背を丸め伸びする猫の長き影

足元灯の壁に映れり

暗闇に降り積む雪の如きかな

南天の蕾の軒の明るき

足元に月の光の明るさよ

目ざむければ一人の夏に入んとす

北に向かうフロントガラスに降り初めて

荒々しきや雨粒の音

重なりてもぎたてのナスの光りいぬ

無人売場の朝霧の中

喜々として勉強する子がふと言えり

「空が異様に白く輝く」

我せめて仕事のみは人並みに遂げたしと

夕ぐれの町をチラシまきゆく

虫の音の聞こえぬ耳と知りて立つ

庭におぼろなり白き満月